

Title	教育とマンガに関する研究の全体像：既存の研究と最近の動向から
Sub Title	The framework of studies about education and manga through past studies and recent movements
Author	玉田, 圭作(Tamada, Keisaku)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2010
Jtitle	哲學 No.123 (2010. 3) ,p.207- 228
JaLC DOI	
Abstract	<p>The purposes of this paper were (1) to review past studies about education and manga (Japanese comics), (2) to grasp recent movements about education and manga, (3) to construct the framework of studies about education and manga through past studies and recent movements.</p> <p>Firstly, studies about education and manga can be divided into two categories: reading or creating manga. Studies about reading manga dealt with the effects of reading manga, and the effects were negative or positive. Studies on negative effects of reading manga had two types approach: showing their opinion and perceiving situations, while studies on positive effects of reading manga had two contents: knowledge and attitude.</p> <p>On the other hand, studies about creating manga would be classified into two types: special or general education. Special education is a kind of program which tries to bring up professional manga creators, especially in universities. Meanwhile, general education means challenges to get something thorough the experience of crating manga. Focusing on creating manga has just started, so this is a kind of prospect of future studies.</p> <p>I hope this paper will connect to the development of studies about education and manga in the near future.</p>
Notes	特集：教育学の射程 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000123-0207

てご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

教育とマンガに関する研究の全体像

——既存の研究と最近の動向から——

玉 田 圭 作*

The Framework of Studies about Education and Manga Through Past Studies and Recent Movements

Keisaku Tamada

The purposes of this paper were (1) to review past studies about education and manga (Japanese comics), (2) to grasp recent movements about education and manga, (3) to construct the framework of studies about education and manga through past studies and recent movements.

Firstly, studies about education and manga can be divided into two categories: reading or creating manga. Studies about reading manga dealt with the effects of reading manga, and the effects were negative or positive. Studies on negative effects of reading manga had two types approach: showing their opinion and perceiving situations, while studies on positive effects of reading manga had two contents: knowledge and attitude.

On the other hand, studies about creating manga would be classified into two types: special or general education. Special education is a kind of program which tries to bring up professional manga creators, especially in universities. Meanwhile, general education means challenges to get something thorough the experience of crating manga. Focusing on creating manga has just started, so this is a kind of prospect of future studies.

I hope this paper will connect to the development of studies about education and manga in the near future.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻後期博士課程 1 年

はじめに

近年マンガ研究が盛んである。マンガは、2007年度の販売金額が4699億円で出版物全体（書籍・雑誌合計）の22.5%、部数では12億3512万部で出版物全体の36.7%を占めており（全国出版協会出版科学研究所、2008）、非常に巨大な市場を築いているメディアである。またその読者層も、かつてのようにマンガは子どものものであった時代は今や遠い昔のことであり、現在では老若男女を問わず読まれるようになってきている。一方で、外務省(2007)はポップカルチャーの文化外交への活用の一環として、海外でマンガ文化の普及活動に貢献する漫画作家を顕彰するため「国際漫画賞」(International MANGA Award)を創設しており、マンガは今やわが国から世界へ発信しているメディアでもあるとも言える。

このようにマンガが我々の生活の中に深く入り込みその影響力を増すに伴い、マンガに関する研究も増えてきた。研究といっても、これまでマンガはエッセイや評論レベルで論じられることが多かったのであるが、2001年にマンガ研究を目的とする最初の学会である日本マンガ学会が創設され学術的研究も徐々に増えてきている。

そうした現在のマンガ研究において、教育という観点からのマンガ研究は主要なテーマの一つとなっているとは言い難い。2009年に出版されたマンガ学のハンドブックともいえるべき「マンガ学入門」(夏目・竹内、2009)において、III章:「マンガ学の領域」の項目は「歴史研究」・「マンガ家・原作者論」・「マンガ表現論」・「マンガの読者」・「マンガ雑誌研究」・「マンガ産業論」となっており教育という観点はここに含まれていない。下位のカテゴリーである次のIV章:「マンガ学のアプローチ」において「マンガと教育」という項目がようやく登場してくるのである。

しかし、このことは教育とマンガに関する研究が存在しない、あるいは少なく貧困であるということの意味するわけではない。むしろ教育とマン

ガというテーマは、マンガ研究の中で最も古くから扱われてきたテーマの一つであり、その知見もある程度存在している。ここで問題なのは、教育とマンガに関する研究は混乱の状態にある、すなわち教育とマンガに関する既存の研究の知見が点在しており相互参照されることが少なく、多くの研究は闇に埋もれてしまっているという点なのである。

また、最近既存の教育とマンガに関する研究とは異なる新しい観点からの研究が徐々に現れてきたり、あるいはそうした予兆が見られたりするようになってきた。教育とマンガに関する研究は現在大きな転換点を迎えているとも言えることができ、そうした最近の動向を把握することは非常に重要であると考えられる。

そこで本稿の目的は以下の三つとする。まず、わが国における教育とマンガに関する既存の研究を概観し再発見を行う。次に、教育とマンガに関する研究の最近の動向を把握する。最後に、以上の二点を踏まえ、「点在」・「混乱」・「未開拓」のままの状態である教育とマンガに関する研究を系統的に整理し、その全体像を描き出すことを試みる。

なお、文献の検索については主に以下の手続きを用いた。まず CiNii において「教育」・「学習」・「マンガ」・「まんが」・「漫画」などのキーワードを組み合わせて検索し、加えて竹内(2009)の文献リストを参照した。

1. 教育とマンガに関する既存の研究の概観

本章では教育とマンガに関する既存の研究の概観を行う。教育とマンガに関する既存の研究は主にマンガを「読む」ことによって受ける影響を扱ってきたがその影響は善悪二元論的、すなわち「有害マンガ」と「マンガ利用」という二つの言説に分類することができる(玉田, 2009)。以下それぞれについて見ていく。

1.1. 有害マンガ

「有害マンガ」に関する研究では、暴力シーンや性的シーンを含む「有害な」マンガを読むことにより読者（特に子ども）に与える影響に注目しているが、「有害マンガ」に関する研究には意見表出型と事態把握型という二種類のアプローチがある。

1.1.1. 意見表出型研究

意見表出型研究とは、「有害マンガ」に関しての自分の意見を前面に押し出す研究である。そしてその意見は、マンガの暴力シーンや性的シーンを見ることで悪影響を及ぼすという批判的な意見と、あるいはその批判に対する批判的な意見がそれぞれ存在する。

● 批判的意見

マンガに対する批判的意見は、古くから存在していた。猪野(1953)は、一般の子どもたちに当時愛読されているマンガをいくつか挙げ、その低俗な内容を批判している。たとえば『サボテン君』という西部活劇マンガでは、はじめから終わりまで二挺拳銃の打ち合いで、さらにインディアンは常にやられ役で非人間的侮蔑的に扱われていると述べた。そして「このように人権無視も暴力も非礼も悪口雑言も漫画の世界では自由」であり、子どもの欲求を満足させるマンガの多くがこのような内容を持っているとその内容を糾弾した。さらにこうした低俗な文化はさらに低いほうへ低いほうへと流れ、「文化の発展や人間的発展」、さらには「国の発展」をもとどめるだろうとさえ主張した。

また波多野(1953)は、マンガを禁じ子どもからマンガをひきはなすよりも、マンガを与えることにより子どもをよくしていくべきだと主張した。そしてそのためにはよいマンガを与える必要があるが、現在のマンガは営利と結びつき「冒険マンガ」や「マゲモノマンガ」のような「悪い」

マンガばかりになってしまっているため、マンガを営利から解放し改善していくべきだと述べている。

「わるい」マンガに関しては、柳内(1964)も「わるい」マンガの条件を新刊の子ども雑誌から拾い出しそれを非難した。ここでいう「わるい」マンガの条件とは、「目をそむけたくなる表現(下品な絵)」・「ものを見方をゆがめるもの」・「いのちをそまつに扱うもの」・「低い興味に迎合するもの」である。そしてこうした「わるい」マンガを選別する目をもたせ、「いい」マンガに親しませるような指導が必要であると主張している。

そして堀(1970)は、ハレンチマンガに対し「不潔で醜悪」・「きたならしい」と生理的な嫌悪感をあからさまに示しつつ、そのハレンチマンガを「斬る」ことを試みた。そこでは我々の中には生や暴力のようなハレンチなものへの好み秘められているためにハレンチマンガは売れていると結論づけている。そして、「ハレンチマンガが駅の売店で手軽に売られている片方で、どうして「健全なる青少年の育成」ができるであろうか」と嘆きすら覚えた。

● 批判への批判

このように多くの批判がなされる一方で、こうした批判に対する批判も存在してきた。

津金沢(1966)は、昨今のマンガ有害論は現実のマス・コミ的病原のスケープ・ゴートにマンガが供せられたという点においてその数年前に賑わった「テレビ俗悪論」と酷似していると指摘した。続けて、マンガへの非難のエネルギーは、過酷な受験体制や遊び場の貧困という現状を踏まえ、劣悪なまま放置されている子どもの教育的社会権利の回復へこそ向けられるべきであろうと主張した。

副田(1972)は、少年マンガへの批判を「悪いことばを覚える」・「残酷さにひかれる」・「醜いものにひかれる」・「性への好奇心をあおられる」・

「本を読まなくなる」・「勉強をしなくなる」・「ものを考えなくなる」の七つに分類し、それぞれの批判的検討を行った。そしてその多くは影響が誇張されたり、偏見の対象になったり、スケープ・ゴートの役割が押し付けられていると述べた。

そして赤川(1993)は、これまで多くの場合に使われてきたのは「有害マンガは青少年に悪影響を与える」という、有害なものは有害だ、または悪いものは悪いというトートロジー（同義反復）であるとした上で、有害マンガの規制を目的とする人々にとって、この単純なトートロジーは非常に役立つと述べている。そしてその理由を、有害マンガの有害性というのがこのトートロジーでは疑ってはならない前提で、有害とされる表現がなぜ、どのような意味で有害なのかを議論したり、反論を受けたりする可能性を未然に防ぐことができるからであると結論づけた。

1.1.2. 事態把握型研究

事態把握型研究とは自分の意見を述べるよりも、マンガに対する批判の歴史的な変遷を追ったり、マンガがどのように読まれているかの実態を調査したりすることで事態の正確な把握を目的とする研究である。

東京学芸大学読書科学研究会(1958)は、児童マンガの語彙を明らかにし、国語教育や読書指導を行う手がかりとするために児童マンガから語句を収集し分類を行った。そこでは、「下品なコトバと流行語」・「文法的な乱雑さ」・「符号の多さ」などがマンガの語彙の問題点として挙げ、言語教育の上からこうした点を考慮することが必要であろうと述べた。

また阪本(1959)は、マンガの指導には親の協力が不可欠であるとして、指導の手がかりにすることを目的に親のマンガに対する意見や態度の実態の調査を実施した。その結果、子どものマンガに対する親の態度は全面否定的ではないが、「内容の低俗さ」・「不快な情緒的刺激」・「勉強や読書の妨げ」・「思考力が浅くなる」、などの理由で親はマンガを批判しているこ

とを明らかにした。そしてよいマンガを選択し、よくないマンガを読まないよう指導をするような、選択と指導が必要であるという声が親の間に高いことを示した。

他方で歴史的なアプローチとしては、竹内(1995)の研究が挙げられる。竹内は、非難や弁護の側に身を置くのではなく、「ニュートラル」な立場から戦後のマンガにかかわる事件のありさまやその問題の所在を展望することを試みた。竹内によると、規制運動の源流は1955年の「悪書追放運動」にある。この時期「日本子どもを守る会」や「母の会連合会」およびPTAなどの団体が子ども向けのマンガの「低俗な」描写を批判し「悪書追放運動」を展開した。続いて1970年1月には、四日市市の中学校長会が小学生の間にスカートめくりを流行させたとして『ハレンチ学園』の追放を決定し、県青少年保護審議会に有害指定するよう働きかけた。一方で人肉を食べるという残酷描写に対し規制を受けたのが『アシュラ』である。1970年7月神奈川県児童福祉審議会は『アシュラ』を有害図書に指定し、出版元である講談社にも抗議を行った。その後1990年代前半にはマンガの性表現に関する「有害」コミック問題が起き、出版業界は自主規制に踏み切っていた。

そして宮本(2003)は1938年に内務省警保局図書課から出された「児童読物改善ニ関スル指示要綱」以前の教育的観点からの子どもマンガの問題のありようを紹介している。そこでは、当初からマンガを全否定するような議論は支配的であったわけではなく、むしろ学校教育と子どもの生活との乖離を批判する文脈の中で質の高い議論が展開されていたことが明らかにされた。そして、マンガを読む子どもを教育的に導く方法が模索され、議論の高まりと裾野の広がりと共に質の低い全否定論や全肯定論が現れ、子どもマンガは「問題」であるらしいという認識が普及していったことを示した。このように戦前という時期を対象にしたマンガ研究は未だ少なく、更なる研究が必要とされる分野の一つである。

1.2. マンガ利用

「マンガ利用」に関する研究では、マンガを読むことにより読者に及ぼすポジティブな影響について注目し、マンガを教材や教授の手段として教育的利用につなげることを目的としている。そして「マンガ利用」に関する研究はその取り扱う内容において知識（情動的側面）・態度（情緒的側面）に二分できる。

1.2.1. 知識（情動的側面）

マンガの教育的利用として最も注目を浴びてきたのは、マンガを学習教材として用いることにより知識や情報の獲得を支援するという側面においてであり、その試みは学習マンガという形式で実践されてきた。

学習マンガの利点として、阪本(1964)は以下の三点を挙げている。第一にマンガは既成のイメージを提供できるため、抽象的なことばからイメージを生成する必要のある文章に比べ読み手の負担を軽減しわかりやすく伝えることができる点である。第二にマンガでは連続的な内容の表現と、重要な部分の強調とそうでない部分の省略ができる点である。第三にマンガは子どもに親しまれているため、文章よりも抵抗なく速く読むことができる点である。

こうした学習マンガの教授効果に関する実証的研究もいくつか行われてきた。村田(1993)は、大学生を対象に不動産屋の正しい選び方を題材にした学習漫画の効果の検討を行った。主題の本質的な部分の絵を含む漫画(漫画条件)・本質的な部分の絵を削除して代わりに非本質的な絵で置き換えた漫画(非本質漫画条件)・文章のみ(文章条件)、の三つの異なる条件のテキストをそれぞれ異なる実験参加者に学習させ、条件間での理解度の差を比較した。その結果、主題の本質的な部分の絵を含む漫画は、文章の本質的な部分を要約的に強調するので、理解を促進した。また非本質的な部分を表した絵も、実験参加者が状況を視覚的に捉えることを助けること

がわかった。そしてさらに四種類の新たな文章条件を設定したところ、獲得させたい知識のみをトピックごとにまとめて箇条書きにしたマニュアル条件において漫画条件と同じ結果が見られた。

佐藤(1998a)は、高校生と大学生を対象に、古典学習の理解と記憶に及ぼす漫画の影響を検討した。漫画群(枕草子本文と学習漫画を提示)と本文群(本文のみを提示)の文法・心情理解・内容理解を比較したところ、文法においては両群に差が見られなかったが、心情理解と内容理解に関しては漫画群の得点が有意に高かった。同様の結果が二週間後に行われた再認テストでも確認された。そして事後アンケートでは、高校生において漫画群のほうが本文群よりもプラスイメージの回答を行っていた。

続いて佐藤(1998b)は大学生を対象に、おもしろさや理解度の自己評定、漫画や本への好き嫌い、後にテストがあることを教示するかどうかという要因を加え、文章の読解と記憶に及ぼす学習漫画の影響を検討した。実験参加者を漫画学習群(漫画を用い、後にテストがあることを教示)、漫画自由群(漫画を用い、自由に自分のペースで読むよう教示)、文章学習群(文章を用い、後にテストがあることを教示)、文章自由群(文章を用い、自由に自分のペースで読むよう教示)の四群に分け、その比較を行った。その結果、おもしろさや理解度の自己評定は漫画群でも文章群でもあまり変わりはなく、漫画や本への好き嫌いも内容理解や記憶には影響していなかった。教材を読んだ直後に実施した内容テストでは文章群の得点が有意に高かった一方で、三週間後に実施した再認テストでは漫画群の得点が有意に高く、漫画は長期の記憶保持に有効であることが示された。

さらに向後・向後(1998)は、大学生を対象に「アルカリ性食品」の学習に関して、マンガか文章で学習内容を提示するという条件と、それにマンガによるストーリーを加えて提示するかしないかという条件を組み合わせた四群を設定し、その比較を行った。推論を必要としない、あるいはあ

る程度必要とする問題では、マンガにより学習内容を提示した群において一週間後の再認テストでの成績の落ち込みが文章により学習内容を提示した群よりも少なく、マンガによる提示は記憶保持に有効であった。一方で新しい事態への知識の適用を必要とする問題では、ストーリーをマンガで提示した群においてストーリーを提示しなかった群よりも高い得点を示した。このことより、マンガによるストーリーの提示は読者の状況モデル構築を促進させ、新しい事態への知識の適用を助けることが示唆された。同様に内容の関心度においても、マンガ・文章に関わらずストーリーをマンガで提示した群のほうが高かった。

● マンガ読解力とマンガの読みリテラシー技能

ところで、このようにマンガを学習に利用する際の前提は学習者がマンガを読むことができる、言い換えるならばマンガを読む際に必要とされる基本的能力を獲得していることである。

中澤・中澤(1993)はマンガを読む際に必要とされる基本的能力をマンガ読解力と名づけ、そのマンガ読解力を測定するテストとしてCCCT(Chiba university Comic Comprehension Test)を開発した。そしてマンガ読解力はコマの理解に関わるリテラシーと、コマの連続からストーリーを読み取る文脈理解のリテラシーの二つから成ることが示唆された。

その後中澤(2004)はマンガの読みリテラシー技能を査定するテストとして分量を減らし、選択肢形式の問題を増やすなどした改訂版としてCCCT-3を開発し、小学4年生と大人を対象にCCCT-3を実施した。その結果リテラシー技能は小学4年生から成人にかけて高くなっており、リテラシー技能の発達が確認された。そして、マンガの読みリテラシーはコマの理解のリテラシーと、コマの連続からストーリーを読み取る文脈理解のリテラシーの二つに分類されたが、小学4年生では両方がマンガのストーリー理解に関連していた一方で、大人ではコマの文脈理解のリテラ

シーのみがマンガのストーリー理解に関連していたことが発見された。

次に中澤(2005)はコマの読み取りのリテラシーの発達を、幼児、小学1, 4, 6, 中学2年生を対象に検討した。対象者を二つのグループに分けたところ、幼児と小学1年生が同じグループに、小学4, 6, 中学2年生が同じグループにそれぞれ分類された。年少者グループにとっては絵や表情などの表現よりも、心理的な表現(たとえば心配や不安を表す記号)の理解は困難であるようであったが、年長者グループでは心理的な表現の理解もある程度高くなっていた。すなわち、発達とマンガ読み経験の増加に伴いより高度なマンガ読みのリテラシー技能を獲得していくことが示唆された。

そしてこのマンガの読みリテラシーやマンガ読解力は学習マンガ教材の効果に影響を及ぼすという指摘がこれまでなされてきた。

中澤(2002)は、小学5年生を対象にCCCTによって測定されるマンガ読解力が学習マンガ教材の効果に及ぼす影響を検討した。実験参加者をマンガ群、小説群、説明文群に割り当て、各群の比較を行ったところ、教材としての実際の有効性は教科書的な説明文群が高かったが、教材への評価はマンガ群が最も好意的な評価を示した。そしてマンガ群内において、マンガ読解力の高い学習者はマンガ読解力の低い学習者に比べマンガによる学習の効果が高く、マンガ読解力がマンガを利用した学習に影響していることを明らかにした。

また佐藤(1997)は小学5年生を対象に、CCCTを元に作成したマンガ表現知識の査定を行い、マンガ表現知識が学習マンガ教材の効果に及ぼす影響を調べた。マンガ表現知識が高い学習者は低い学習者に比べ、文章教材・マンガ教材ともにより短い時間で読んでいた。また内容理解に関しても文章教材・マンガ教材ともにマンガ表現知識が高い学習者のほうが高かったが、マンガ教材ではその差は有意ではなかった。

しかし一方で、小学5年生のように年少者を対象とした場合はこのよ

うにマンガ読解力やマンガの読みリテラシーが学習マンガ教材の効果に影響を及ぼすが、青年では既に高いマンガの読みリテラシーを獲得しているため学習マンガ教材の効果には影響しないという知見も存在している (Tamada, 2009).

1.2.2. 態度 (情緒的側面)

上記に挙げた知識に比べるとその数は少なく実証的な検討もほとんど行われてはきていないが、マンガを読んで態度が変化する、何かのきっかけになる、興味を持つようになるというような態度 (情緒的側面) に注目した研究も存在している。

副田 (1973) によると、マンガを読むときは登場人物の表情や動作を含む情景からかれらの内面である心理の動きを想像していくという「情景→心理」という想像力が必要とされる。そしてこの想像力は他者の心理を洞察する能力と似通っており、ゆえにマンガを読むことにより現代の子どもたちはその能力を成長させているのではないかという仮説を提唱した。

阪本 (1973) は、真のユーモアとは意味の二義性で笑わせるものであり、そうしたユーモアを持つ『サザエさん』・『のらくろ』・『鉄腕アトム』などのマンガを読むことはユーモアの開発に有効であろうと述べている。しかし一方で、同じマンガでもくすぐりの多い『おそ松くん』・『ガキ道講座』などを読んでユーモアを養うには足りないであろうとも考えている。

浜田 (1973) も同様にマンガの持つユーモアを取り上げている。浜田によると、昔ながらの一コママンガや四コママンガでは笑い・ユーモアを基調として諸々の感情を取り扱っており、それを説明ほとんど抜きにしてフィーリングやイメージによって補い読むことは、人間の成長にとって必要であると認めている。

また、図書館におけるマンガの受け入れが進むにつれ、その効果や影響を調査した研究も現れてきた。溝畑 (1989) は、マンガを受け入れたこと

により図書館に来る生徒が増え、本にあまり興味のなかった生徒も来るようになり、図書館と生徒とのつながりがより強くなったと感じたと述べている。段(1989)もマンガを図書館に導入したことのメリットを、マンガがなければ決して図書館に足を踏み入れなかったと思われる生徒が多く来館するようになった点であるとしている。

2. 教育とマンガに関する研究の最近の動向

本章では教育とマンガに関する研究の最近の動向を把握し、今後の展望を行うことを試みる。教育とマンガに関する研究の最近の動向は、大きくマンガを「描く」ことへの注目と、「マンガ利用」の中の「態度(情緒的側面)」に注目する実証的研究の増加という二つの流れに分けられる。以下ではそれぞれを順に見ていく。

2.1. マンガを「描く」ことに関する研究

上記のように既存の研究はマンガを「読む」ことによって受ける影響を扱ってきたが、最近の動向としてマンガを「描く」という新たな観点への注目と、そうした観点からの研究の出現をうかがうことができる。そしてマンガを「描く」ことに関する研究はさらに専門教育(プロのマンガ家養成)と一般教育との二種類が存在すると考えられる。

2.1.1. 専門教育(プロのマンガ家養成)

専門教育とは、より優れたマンガ作品を創作することができるプロのマンガ家養成を主たる目的とする教育のことであるが、近年特に大学においてその動きが盛んである。マンガを扱う大学の増加を受けて、2009年6月に開催された日本マンガ学会第9回大会のシンポジウムのテーマは「大学でマンガ!?!」であったが、そこではマンガについて教える学部・学科を持つ大学の現状が実際に大学で教壇に立つ教員たちから報告された。

そもそも日本の大学で最初に「マンガ」の名称を採用したのは、1973年の京都精華大学美術科デザインコースマンガクラスである。そこから少し間が空いて2000年に京都精華大学芸術学部マンガ学科ができたのを皮切りに、多くの大学がマンガに関する学部や学科を設置し始めた（吉村，2009）。現在日本の大学におけるマンガ学科やそれに類する学科・専攻の数は19である（Wikipedia, 2009）。

そしてマンガ学科では編集者、プロデューサー、研究者の育成も視野に入れられているものの、多くの場合主たる目的はプロのマンガ家育成にあり、言い換えるならばマンガ学科とはプロのマンガ家養成機関であるとも言える。

これまではマンガを描く技術は大学で教えられるものではなかった。マンガ家たちはアシスタントという徒弟制度において眼で師匠の業を盗んだり、同人活動を通じ自学自習したり、あるいは編集者と二人三脚を行ったりと、経験的にマンガを描く技術を学んできていた。それが大学という制度の中で体系的に教えられるということが、今後生み出されるマンガにどのような影響を与えるのかというのは非常に興味深い問題である。

こうしたマンガ学科ができたのがごく最近であるため専門教育に関する研究は今のところほぼ存在しないが、取り上げられるべきテーマとして、マンガを「描く」リテラシーとは何か、どのようなカリキュラムを作成するか、授業をどのように構成するかなどが考えられる。今後の発展が最も期待される領域の一つであると言える。

2.1.2. 一般教育

専門教育のようにプロのマンガ家を目指す人に対象を限定せず、より多くの人々がマンガを描くという表現活動を通じそこから何らかの意義を見出していくことを目指す教育のことをここでは一般教育と呼ぶこととする。



図1 マンガ表現法の例 (鈴木・加藤, 2008a)

鈴木・加藤 (2008a) は、プレゼンテーション構成における社会的ネットワークの訓練手法として、「マンガ表現法」を提案した。なおマンガ表現法とは自分のプレゼンテーション内容をマンガの形式で表現し、そのマンガを吟味することでプレゼンテーションの改善を行う方法である (図1)。そしてマンガ表現法によって作成されたプレゼンテーションメッセージの説得性を論理図により作成した群と比較した結果、マンガ表現法を行った群のほうがメッセージの説得性が高いことが示され、マンガ表現法はプレゼンテーションの説得性に寄与すると主張した。

続いて鈴木・加藤 (2008b) は、社会的ネットワーク作業の基盤である関係把握に着目し、そのための訓練手法としてマンガ表現法を提案しその効果を検討した。結果として問題に関連する人々の声や感情や社会関係の把握を促進することが明らかになり、マンガ表現法は社会的ネットワークの訓練に有効であると結論づけた。

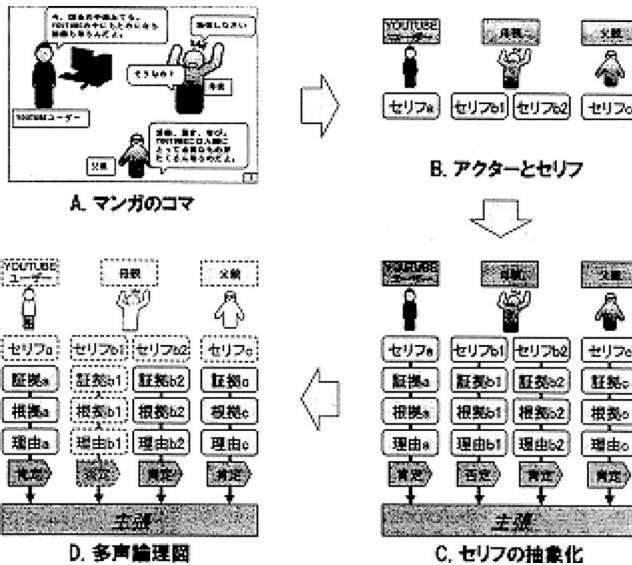


図2 多声論理図法と多声論理図 (舟生・鈴木・加藤, 2009)

さらにその後舟生・鈴木・加藤(2009)は、マンガ表現法は関連する人々や社会関係の把握を促進するという点において多声性が高いメッセージを作成できるが、一方で論理性は低くなるという問題点を指摘した。そこでメッセージの多声性と論理性を同時に高めることのできるような、マンガの表現をベースに論理的な図を構成する多声論理図と多声論理図法を提案した。多声論理図法は、マンガのコマを基点、アクターとセリフの抽出、セリフの段階的な抽象化、そしてセリフの選択を行う多声論理図という段階を踏む(図2)。

こうした視点とは異なる、現役のマンガ家である傍ら大学や専門学校でマンガの描き方を教えている菅谷(2009)の主張も注目に値する。菅谷はマンガ初学者にマンガの描き方を教えていく中で、受講者が受講前にはマンガを描く自信がなかったが受講後には自信や楽しかったという感想を持つようになったことから、マンガを描くことは生涯教育の一つになること

ができると考えている。さらに、「マンガ家志望者のためではなく、マンガを趣味として、人生の楽しみとして描くという視点があってもいいのではないかと考えた」とも述べている。今後マンガを「読む」楽しみだけでなく、マンガを「描く」楽しみも視野に入れ、マンガの「楽しみ」をより広く多角的に捉えていくべきであろう。

2.2. 「態度（情緒的側面）」への注目

これまで「マンガ利用」の中の「知識（情動的側面）」に焦点を当てた実証的研究はある程度進んできた一方で「態度（情緒的側面）」に関しての実証的研究はほぼ皆無であったが、最近の動向として「態度（情緒的側面）」に注目する実証的研究が増加してきている点が指摘できる。

家島(2006)は人がマンガから何を学んで成長しているのかを明らかにするために、インターネット上のコミュニティにおいてマンガから受けた影響に関する書き込みを収集し、KJ法において分類を行った。その結果、マンガからの影響内容は「恋愛」・「友情」・「努力」・「人生」・「知識」の五つの主要なテーマに集約された。そしてマンガからの影響結果については、「勇気づけられた」・「慰められた」という情動的側面に対する影響と、「考えさせられた」という認知的側面に対する影響に分類された。

続いて家島(2008)は、現代社会における青年の自己形成の困難さに言及した上でマンガを「自己形成を支援するツール」としてとらえ、その利用可能性と功罪について検討した。さらに、マンガを介し自らが好むナラティブパターンを自己理解させそこから新たなナラティブを紡ぎだせるような、マンガを介した自己形成支援プログラムを構想した。

また Tamada (2009) は、マンガ読解リテラシーと空間能力という認知的要因が青年のマンガ利用学習に及ぼす影響を検討した。結果としては、どちらの認知的要因もマンガ利用学習には影響していなかった一方で、マンガに対する好意的評価という情動的要因がマンガ利用学習に影響を与え

ていることが明らかになった。そしてマンガに対する好意的評価の理由の「おもしろさ」に注目し、マンガの「おもしろさ」や、そのマンガの「おもしろさ」がどのようにマンガ利用学習に影響しているのかを今後検討する必要があると主張した。

3. 教育とマンガに関する研究の全体像

以上を踏まえ、図3に示すような教育とマンガに関する研究の全体像を構築した。

まず、教育とマンガに関する研究はマンガを「読む」ことに関する研究と「描く」ことに関する研究に大きく二分される。マンガを「読む」ことに関する研究では、マンガを読むことにより受ける影響を扱っているが、その影響は「有害マンガ」と「マンガ利用」に分類できる。「有害マンガ」に関する研究では、暴力シーンや性的シーンを含む「有害な」マンガを読むことにより読者（特に子ども）に与える影響に注目しているが、そこにはさらに意見表出型と事態把握型という二種類のアプローチがある。一方

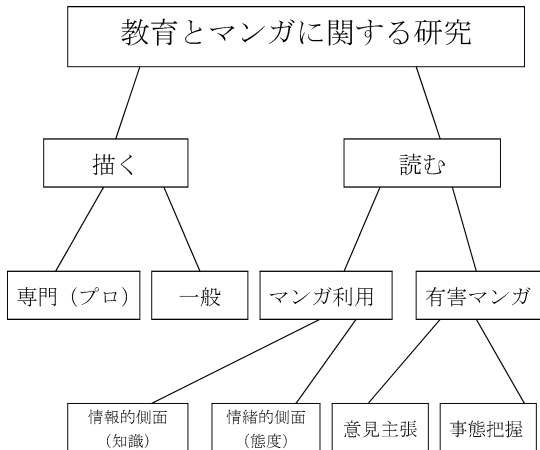


図3 教育とマンガに関する研究の全体像

で「マンガ利用」に関する研究では、マンガを読むことにより読者に及ぼすポジティブな影響について注目し、マンガを教材や教授の手段として教育的利用につなげることを目的としており、その取り扱う内容において「知識（情動的側面）」と「態度（情緒的側面）」に分類できる。中でも「態度（情緒的側面）」に注目する実証的研究が近年増加してきている。

そしてマンガを「描く」ことに関する研究はさらに専門教育（プロのマンガ家養成）と一般教育と二種類が存在すると考えられる。専門教育とは、より優れたマンガ作品を創作することができるプロのマンガ家養成を目的とする教育のことである。一方で一般教育とはプロのマンガ家を目指す人に対象を限定せず、マンガを描くという表現活動を通じそこから何らかの意義を見出していくことを目指す教育のことである。なお、マンガを「描く」ことに関する研究は現在ほとんど存在していない。そのためこの部分に関しては最近の動向を踏まえた上での展望に近いものであるということをご承知いただきたい。

おわりに

本稿では最初に日本における既存の教育とマンガに関する研究を概観し、次に教育とマンガに関する研究の最近の動向を把握し、最後に教育とマンガに関する研究の全体像の構築を試みた。

本稿では日本のマンガと海外のマンガの質的差異や社会的文脈の違いなどを考慮し、海外における教育とマンガに関する研究は扱わなかった。しかし海外における研究が皆無というわけではなく（Fukunaga, 2006 や McVicker, 2007 など）、今後扱っていく必要がある。また、今回既存の教育とマンガに関する文献を全て網羅できたわけではなく、特に筆者の専門領域である心理学的研究にやや偏っている点は否めないと感じている。

しかし、少なくともこれまで「点在」・「混乱」・「未開拓」であった教育とマンガに関する研究という大地を開拓し、後に続く人が第一歩を踏み出

教育とマンガに関する研究の全体像

すための整備は行うことができたと思自負している。今回描き出した教育とマンガに関する全体像(図3)は完成品ではなくあくまで一つのたたき台であり、今後の研究を加え更新していく必要があると考える。最後に、本稿を契機に教育とマンガに関する研究が更なる発展をとげていくことを願い結びとしたい。

註: 本研究は平成21年度慶應義塾大学大学院博士課程学生研究支援プログラムによる研究補助を受け行われた。

引用文献

- 赤川 学(1993). 差異をめぐる闘争—近代・子ども・ポルノグラフィー. 中河伸俊・永井良和(編) 子どもというレトリック—無垢の誘惑. 青弓社 pp. 163-200.
- 段 正一郎(1989). 高校図書館とマンガ—実態調査とその分析. 学校図書館, **468**, 41-49.
- 外務省(2007). プレスリリース 「国際漫画賞」の創設について. 2007年5月22日 〈http://www.mofa.go.jp/Mofaj/press/release/h19/5/1173498_804.html〉(最終アクセス日2009年10月26日).
- 浜田陽太郎(1973). マンガの教育学—マンガと人間形成. 児童心理, **27**(9), 42-49.
- 波多野完治(1953). マンガをどうするか—視聴覚教育論の立場から. 教育, **3**(12), 84-95.
- 堀 秀彦(1970). 「ハレンチマンガを斬る」ために. 児童心理, **24**(7), 105-109.
- Fukunaga, Natsuki (2006). "Those anime students": Foreign language literacy development through Japanese popular culture. *Journal of Adolescent & Adult Literacy*, **50**(3), 206-222.
- 舟生日出男・鈴木栄幸・加藤 浩(2009). マンガ表現法におけるプレゼンテーション構成の多声性と論理性を高める多声論理図の提案, 信学技報, **108**, 47-52.
- 猪野省三(1953). マンガの功罪, 教育, **3**(8), 22, 75-81.
- 向後智子・向後千春(1998). マンガによる表現が学習内容の理解と保持に及ぼす効果. 日本教育工学雑誌, **22**(2), 87-94.

- 家島明彦(2006). 人がマンガから受ける影響についての探索的検討—インターネット上のコミュニティにおける書き込みの分析. 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 194-195.
- 家島明彦(2008). マンガを利用した青年の自己形成支援プログラム作成に向けて 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 98-111.
- McVicker, C. J. (2007). Comic Strips as a Text Structure for Learning to Read. *The Reading Teacher*, 61(1), 85-88.
- 宮本大人(2003). 「問題」化される子供漫画—「児童読物改善ニ関スル指示要綱」以前の「教育的」漫画論. 別冊子どもの文化, 5, 41-58.
- 溝川嘉章(1989). 図書館と生徒のつながりを強めた—大阪成蹊女子高等学校—学校図書館でのまんがの受入れ(実践レポート). 学校図書館, 468, 36-38.
- 村田夏子(1993). 教授方略としての漫画の効果. 読書科学, 37(4), 127-136.
- 中澤 潤(2002). 学習マンガ教材の効果に及ぼすマンガ読解力の影響. 千葉大学教育実践研究, 9, 13-23.
- 中澤 潤(2004). マンガ読解力の規定因としてのマンガの読みテラシー. マンガ研究, 5, 6-25.
- 中澤 潤(2005). マンガのコマの読みテラシーの発達. マンガ研究, 7, 6-21.
- 中澤 潤・中澤小百合(1993). 漫画読解力の発達—漫画がわかるとは何か 子どもと漫画—「漫画読解力」はどう発達するか. 現代児童文化研究会報告書, pp. 85-189.
- 夏目房之介・竹内オサム(2009). マンガ学入門. ミネルヴァ書房.
- 阪本一郎(1959). 児童漫画の世論調査の試み. 読書科学, 3(4), 1-9.
- 阪本一郎(1964). 学習漫画のあり方. 児童心理, 18(3), 16-25.
- 阪本一郎(1973). マンガの読み方・読ませ方—マンガから読書指導へ. 児童心理, 27(9), 50-59.
- 佐藤代(1997). 学習漫画理解に及ぼす「漫画表現」の役割—説明文章との比較において. 愛媛大学教育学部紀要 第I部. 教育科学, 43(2), 85-95.
- 佐藤代(1998a). 古典学習の理解・記憶に及ぼす漫画の効果. 愛媛大学教育学部紀要 第I部. 教育科学, 44(2), 45-48.
- 佐藤代(1998b). 文章の読解, 記憶に及ぼす漫画の役割. 愛媛大学教育学部紀要 第I部. 教育科学, 45(1), 53-58.
- 副田義也(1972). 少年マンガ—七つの大罪は本当か. 児童心理, 26(12), 52-57.
- 副田義也(1973). 子どもにとってのマンガ—少年マンガにおける想像力の問題. 児童心理, 27(9), 16-23.
- 菅谷 充(2009). 私的コミュニケーションによる.

教育とマンガに関する研究の全体像

- 鈴木栄幸・加藤 浩 (2008a). マンガ表現法による社会的ネットワーキング訓練がプレゼンテーションメッセージの説得性に与える効果の検討. *メディア教育研究*, 5(2), 137-144.
- 鈴木栄幸・加藤 浩 (2008b). 社会的ネットワーキングに着目したプレゼンテーション教育手法「マンガ表現法」の提案. *科学教育研究*, 32(2), 196-215.
- 竹内オサム (1995). 戦後マンガ 50 年史. 筑摩書房.
- 竹内オサム (2009). 本流! マンガ学—マンガ研究ハンドブック. 晃洋書房.
- 玉田圭作 (2009). 教育とマンガの架橋構築における教育心理学の役割. *日本マンガ学会第 9 回大会研究発表*.
- Tamada, Keisaku (2009). The effect of comic reading literacy and spatial ability in learning by comics for adults. *SARMAC (The Society for Applied Research in Memory and Cognition) VIII*.
- 東京学芸大学読書科学研究会 (1958). 児童漫画における語彙の研究. *読書科学*, 3(1), 19-27.
- 津金沢聡広 (1966). 児童漫画の教育社会学的考察—その功罪論を中心に. *青少年問題研究*, 9, 57-72.
- Wikipedia (2009). マンガ学科 最終アクセス日 2009 年 10 月 26 日 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%82%AC%E5%AD%A6%E7%A7%91>
- 柳内達雄 (1964). いいマンガ・わるいマンガの条件—漫画の教育学. *児童心理* 18(3), 208, 326-331.
- 吉村和真 (2009). マンガと教育 夏目房之介・竹内オサム (編著) マンガ学入門. ミネルヴァ書房. pp. 158-162.
- 全国出版協会出版科学研究所 (2008). 2008 出版指標年報 全国出版協会出版科学研究所.